

# 万華鏡



Vol.62

# 文化祭号



# 下足痕踏んじやいました

麻生みこと（白泉社 2022）

けいさつかん かとうそら こうばんきんむ かわさきひがしよけいじだいいつか  
警察官・加藤宙は交番勤務から川崎東署刑事第一課  
きょうこうはんがかり いどう としたた じよせいけいじ くどうはな  
強行犯係に異動となった。年下の女性刑事・工藤花とバディ  
く り しよぞく まつゆきはん こせいゆた かこ  
を組み、2人が所属する松雪班の個性豊かなメンバーに囲まれ  
ながら、しょかつない つぎつぎ お ちんじけん かいけつ ほんそう  
所轄内で次々と起こる珍事件を解決するために奔走す  
る。

ひとよ かとう じけんかんけいしゃ どうじょう こうばんきんむ ころ  
お人好しな加藤は事件関係者に同情したり、交番勤務の頃  
ちいま みな 顔 けいさつかん いげん  
は地域の皆さんにモテモテだったり、顔に警察官としての威厳  
がないからまえがみ あ ひと けいじ いかが  
前髪を上げたりと、いい人だけど刑事としては如何  
なものか…、というかん じつぼう かとう きょういくがかり  
感じ。一方、加藤の教育係でバディの  
くどう あく ゆる つよ けいじ こがら きゃしゃ はんにん かるがる な  
工藤は悪を許さない強い刑事。小柄で華奢だが、犯人を軽々投  
げ飛ばせるかなりのぶとうは  
武闘派だ。

じけんかんけいしゃ お きまざま にんげんかんけい ふくざつ  
事件関係者が織りなす様々な人間関係によって複雑になっ  
ていくじけん と あ  
事件を解き明かすことができるのか——。

ものがたり きょうあくじけん たんどう かり けいじ しゅじんこう  
この物語は凶悪事件を担当する係の刑事が主人公ですが、  
さつじんじけん お はんにん じゅうげきせん  
殺人事件が起きて犯人と銃撃戦に——。なんてことはなく、  
ひとよ かとう なに たび くどう しか と しら  
お人好しな加藤が何かやらかす度に工藤に叱られたり、取り調  
べも少しコミカルな感じで書かれているので、読むとクスツと  
わら とくちよう なん い さいだい とくちよう ぶたい  
笑えるのが特徴です。そして何と言っても最大の特徴は舞台  
かわさき かわさき かわさきえきしゅうへん き  
が川崎であることです。川崎あるあるや川崎駅周辺の聞いた

ことがある場所がたくさん出てきます。川崎によく行く人や近くに  
住んでいる人にも読んでほしい1冊です。

個性豊かなキャラクターたちが川崎で織りなす警察×ヒュー  
マンコメディをぜひ読んでみてください！



# 異邦人

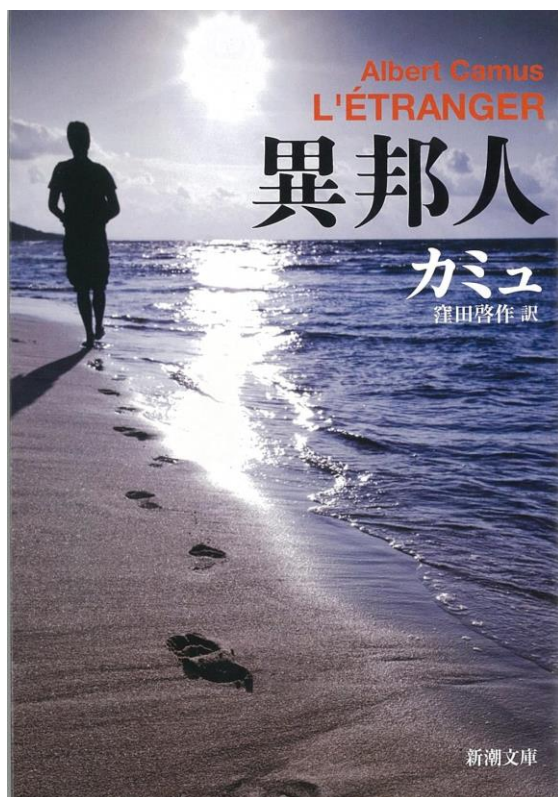
アルベール・カミュ（新潮文庫 1954）

ある日、主人公ムルソーのところに、母親の訃報が知らされる。にも関わらず、なんの驚きも哀愁も感じない彼は、相も変わらず平凡な日々を過ごしていく。愛犬に逃げられた老人の話<sup>はなし</sup>を聞いてやり、友人に誘われて海<sup>うみ</sup>に行く。そして、太陽の眩しさのせいで人を殺害するに至る。彼は裁判になっても、非常識的な主張を一貫して貫き、弁護士、司祭からも孤立、ついには死刑判決を受けるのだった。

あらすじを読んで、皆さん意味不明だったと思います。どこが一番引っかかるかといえば、物語の山場である殺人と、その動機ではないでしょうか。「あいつをずっと恨んでいた」とか「政治的な理由で」とか、お決まりのパターンに見覚えがある方なら、「太陽の眩しさのせいで」ってどういうこと？ と思うかもしれません。ですが事実、彼は太陽が眩しかったものだから鉄砲で人を撃ち殺してしまったのです。

皆さん一度考えてみてください。何らかの行動には必ずれっきとした理由があるというのは、本当にそうでしょうか。世界はまだまだ分からない事だらけです。であれば、合理性の通じる領域は有限といえるのではないのでしょうか。

この関係こそが作者の追求した「不条理」なのです。ですので、本書を読むうえで筋の通らぬムルソーの行動の数々に驚かないでいただきたい。その点にさえご理解いただければ、後は気兼ねなく笑える作品になっているはずです。特に、ムルソーと司祭との掛け合いが独特すぎて面白いので、ぜひともそこに注目を。



「じゃあ、パワーポイントは来週までに仕上げてくるように。さっきも言ったけど、テーマは『みんなに知って欲しいもの』やからな〜」

その言葉を最後に、担当の教師は教室を後にした。

「え〜何にする？ やっぱユイはKPOP？」

「もちろん！カナデはなんか決まった？ 前言ってたゲームのキャラとかいいやんか」

「あくなくはないけど…今度発表あるし慎重に決めときたいよな」

授業が終わるなり、クラスでは各々のグループで情報を共有しているようだ。

かく言う俺も、数少ない友人の野島と作戦会議中である。

「俺は絶ツツツ対にカバディの面白さを布教したんねん！！ 死んでも流行らせたるー！！」

「えらい情熱的やけど多分流行らんで…お前だけやで、きょうびそんなマイナースポーツやってるやつ」  
水筒のお茶をひと口含んだあと、彼とは対称的な熱量で彼と言葉のキャッチボールを交わす。

「だからやんねやる?! ええか、サッカーとか野球とか、みんな知ってるもん紹介しても、なんか味気ないやん? 俺しかやってへんからこそ、それを知ってもらおうチャンスやねん。お前はなんかないん? 自分にしか紹介できへん『推し』みたいなもんは」

「…それは…」

突然豪速球ストレートをぶつけられて、言葉に詰まってしまった。

たかが授業やろと思つて、適当な食べ物とか、最近好きな芸人とかでええかなつて言おうとしてたから。

体育祭とかで、ふざけてるヤツよりも一生懸命やってるヤツの方がかつこいいみたいな、そういう雰  
囲気に当てられた。

「まあすぐには決まらんよな。まとめやすさとかもあると思うし。でも、何にするか決まったら俺に教えてやろ。じゃ部活行くわ、お疲れー」

返答に困っていることを察してくれたのか、さりげないフォローを入れて野島は去っていった。

野島は案外、こういう時に気遣いが出る男なのだ。

時計を見ると俺もバイトの時間が迫ってきていたので、荷物を背負い学校を出ることにした。

ただ歩くだけじゃ味気ないから、音楽を聴きながら道を進んでいく。

イヤホンからは好きなバンドの軽快なイントロが流れているのに、頭の中で野島の言葉がぐるぐるして、全く歌に集中できなかった。

バイトが終わってからもあいつが言った言葉の意味ばかり考えた。

…自分には紹介できへんって、それを言い切れる自信があるくらい知り尽くしてる、とも解釈できへんやろか…。でも、俺にはあいつみたいに熱中できるもんがないし、好きなもんも浅く広いから到底「推し」とはいにくい。

自分が知り尽くしてて、他の人に知って欲しい、俺の「推し」…

——あ。

ひとつ。ひとつだけおもいついた。でも、これを俺が、クラス全員にうまく伝えられるやろか。なんて思われるかめっちゃ怖い、けど。

俺が一番知ってて、一番みんなに知って欲しくて、一番大事にしてるってことは、絶対に言い切れる。

そこからの行動は早かった。数日のうちに爆速で資料を作成し、発表の前に野島に見せたところ、「めつつちゃええやんけ〜！！　なんか、いい意味で予想裏切られたって感じや」



とお褒めの言葉を預かった。ちなみに、野島は資料作成が言い渡された次の日に台詞まで完璧に仕上げたらしい。

その甲斐あつてか、奴はほぼ完璧にカバディの魅力を伝えきつた。こいつのあとに発表するのは気が引けるけど、やるだけやつたる。

教卓の前に立ち、深呼吸をひとつ。たかが授業。されど授業。

俺にしか知り得ないもの。俺が知って欲しいもの。

それは臆病で、卑屈で、繊細で、平凡な。

「俺の知って欲しい人、それは、俺自身です」

あとがき

こんにちは。自分の執筆する作品には、少なからず私自身のポリシーやモットーみたいなものを組み込んでいます。今回は自分の長所や短所、周りの友人関係、環境など、そんなところもまとめて愛せる自分でありたいという想いを込めて執筆させていただきました。

自分はすごく時間にルーズな所があるのですが、そのせいでよく遅刻や忘れ物をしてしまいます。しかし大切なのはそのあとだと思えます。再発防止のために何をすべきか。自分の意識から変えていけたらそもそも遅刻しません手遅れですお疲れ様でした

## スプラウトヘインタビュー！

鶴見高校図書委員会と花屋兼カフェ・スプラウトのコラボレーション企画！

万華鏡班よりテンジクネズミ、てるるの二名がインタビューを行いました。

## スプラウト

鶴見高校のすぐ近くにある花屋。地域を盛り上げるため、カフェの併設、鶴見高校プール脇花壇の整備、出張マルシェなども行っている。

―それではインタビューを始めます。よろしくお願いたします。

お店はいつから始めましたか？ この場所にしたのはなぜですか？

「六年前ぐらい。実家が隣にあつて、土地が自分のものだったから。」

―好きな花を教えてください。

「ダリア。一つのお花で花びらがグラデーションになっているようなお花をみると感動します。」

「カフェのおススメのメニューは？」

「ランチプレート！ 季節の食材が食べられて、ハーブに漬けたグリルチキンはとっても美味しいですよ♪」

「『万華鏡』を配布していただいたり、プールの脇の花壇整備はいつから、どんなきつかけでしているのでしょうか。」

「四年〜五年前でしょうか。正確にはわかりませんが……もともと花屋でやりたい事の一つが、通りすがりの方がちよつとでも「綺麗」や「季節」を感じて頂けたらなと

思っていて、それが購入に繋がらなくても、街にとっては素敵な空間になると思いました。

それは使われていない花壇も同じ。土が見えてしまった花壇より何かが植えられていて、花が咲いていたり、頑張つて蕾を作っていたり……そんな自然な姿をみたら、きっと誰かの心が軽くなつたり、それが何かの会話になつたり……そんな“可能性”の芽をたくさん作りたいたいなと思っています。店名のスプラウトもそこからです。」

―地域に関わる活動をしていて、大変だと

思ったことはありませんか？

「お店との兼ね合いやスケジューリングが難しいですね。」

―お店にある雑貨はどこから仕入れていま  
すか？

「雑貨はモロツコから輸入しています。」

―どんなお客さんが来ていますか？

「ご家族連れが多い。ワンちゃん連れの人  
も多いです。」

―ポストカードが売っているのはなぜです  
か？

「花を贈るときにメッセージを書けるよう  
に。」

―メニューを考えるときに工夫しているこ  
とは何ですか？

「お店のスタッフや市場の人と話して決め  
ています。花屋なので季節感を大事にした  
いです。」

「これから鶴見高校としていきたいことはありますか？」

「高校生が何が欲しいか調べたい。学生と  
いっしょに作り上げたいです。アンケート  
などで学生の声を集め、そのメニューをお  
店で出すとか。」

「その他「地域に関わる活動」で、どのよ  
うなことに取り組んでいますか。」

「またそれを始めたきっかけを教えてください。  
」

「地域のケアプラザと連携して、ご高齢の  
方のお買い物にいけない問題と向き合い、  
出張マルシェをしたり、お店に小さい子供  
たちを招待してイベントをしたりしていま  
す。あとは街のお祭りなどのボランティア  
にも積極的に参加しようと思ってます。」

「お誘いを受けたのがきっかけですが、思っ  
ている事を口に出していると、意外と人と人  
が人を結びつけてくれて、輪が広がり色ん  
ないイベントをしようというようになりまし  
た。」

―今後、花屋として、カフェとして、そして「地域活動」として、どんなことをしていきたいですか？

「一つは今やっている事を続けていきたいです。続けるのが結構難しいので。新しいお話や魅力的な依頼を頂き、それを両立させていただくのに日々一生懸命になっていきます。

あとはスタッフも増えてきたので、より地域のために何かできる事を模索して行きたいと思います。ご高齢の方たちが困っている事、子供達が必要としている事、働くお

母さんお父さんの助けになれること…色々な側面で考えて、トライしてみたいと思います。

花屋がやるカフェを運営していますが、今後は花屋がやる駄菓子屋に挑戦しても面白いかもしれませんね。あまり常識にとらわれず、心が動くものを行きたいと思っています。それがきつと他の人の心を動かす気がするので。」

ーインタビューへのご協力、ありがとうございます！

新しいことに挑戦するスプラウトさんに刺激をもらい、われわれ図書委員会もより一層、読書を通じた地域振興に力を入れていきたいと思いました。

## あとがき

今回スプラウトさんにインタビューを行い、地域振興のために行っていること、将来の展望についてお話を聞きました。

今後、よりニーズに応えるために鶴見高校へアンケートを取り調査したいとおっしゃっていました。

(テンジクネズミ、てるる)



又 月 日 月 日 日 一

S P A R P

